

木々高太郎
全集

2

新 声
松か

木々高太郎全集

2

折 芦 ほか

朝日新聞社

木々高太郎全集

2



折 芦 ほか

昭和 45 年 11 月 25 日 第 1 刷発行

著 者 木々高太郎

著作権者 林 峻一郎

装幀者 原 弘 (NDC)

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 図書印刷株式会社

発行者 朝 日 新 聞 社

© Shunichiro Hayashi 1970

東京 大阪 北九州 名古屋

木々高太郎全集 2

目次

女と瀕死者	7
無気味な老医師	19
＊エキゾチックな短篇——八篇	
緑色の目	26
盲いた月	42
死の乳母	64
夜の翼	75
ヴェニス of 計算狂	88
大浦天主堂	102

女の政治……………116

水車のある家……………135

文学少女……………153

*長篇小説

折芦……………172

女の復讐……………320

蝸牛の足……………333

封建性……………350

作品解説 中島河太郎……………371

木々高太郎全集 2

折芦ほか

女と瀕死者

1

「どうも、貞男の奴がすっかり変ってしまつて困っているのだが、相談に乗ってくれないか」

用事があるというので、兄の家に行ってみると、そういう話であつた。貞男というのは僕の甥なのだが、僕は兄弟のうちでは末っ子であつたから、一番上のこの兄とは二十歳以上も年齢が違うが、かえつてこの兄の長男である貞男とは五つばかり違うだけで、いわば叔父でもあるし、兄弟でもあるし、さらに、先輩でもあるように、馴れ親しんでいた。

「變つてというのはどう變つたのです。近頃僕も少し、いそがしくなつたものだから、しばらく貞男にも逢いませぬが」

「いや、どうも、この夏、葉山へやつたのだ。避暑だといふので。ところが俺も、嫂ねえさんもしそがしくつてほとんど行かなかつたのだ。それで、貞男一人だけいることになり、まあ、本人もその方がかえつていいと言つていたのだが、どうも秋になつて歸つて來てから變つたと思へん」

「だからさ、どう變つたかと言ふんですよ」
「變つたと言ふからには、どう變つたと言えぬのだ。言えぬから變つたと言ふのだ」

兄は、問いつめられて癪かんしゃく癪しゃくを起して、そんなことを言つた。貞男の何か變なかわりようが、この一家の調子をすっかり狂わせているとも見える。

とにかく、僕は、実物を見るにしかずと思つたので、兄の話はそのままにして、貞男の居間に首を出した。

「おい。貞男、いるのか」

貞男の書斎は、どうも日当りのよくないところになっている。日当りの悪いのは、しかし二、三年この方馴れているのだから、貞男の変ったといふことの何も直接の原因である筈がない。いつも、僕が来て、こう呼ぶと、響くように応じて来なくてはならぬ貞男が、確かに居間にいるらしいが、黙っている。僕は遠慮なく障子をあけて入り込んだ。

貞男は、何かドイツの絵入り雑誌の口絵を見ていたが、僕の顔を見ると、黙って雑誌を閉じた。そして小さい声で、「叔父さん、久しぶりだったな」と言った。

二人は叔父甥であつたが、そんなぞんざいな言葉を言い合っていたのだ。

「貞男、どうかしたのか」

なるほど、逢つてみると、どこか様子が違っているのだ。

貞男が黙っているので、

「どうだ。医者に見て貰ったのか」

と、うっかり僕は変なことを聞いてしまった。

「病氣じゃあないのだよ、どうも。しばらく放つて置いて貰いたいのだ」

貞男はそう言った。

そして、またいったん閉じたドイツの絵入り雑誌を開い

て見始めた。僕は黙つてその様子を見ていたが、どうも、その様子が普通ではないのだ。何かこう、その雑誌のどのページかに心を惹かれて、不随意に、その雑誌を繰っているような様子がある。見ると、貞男はその雑誌の、女の半身像の出ているページを出して、しきりに眺めているのだ。貞男の指が、細長く、そのページの端を押さえている。とにかく貞男は、その指でもわかるとおり瘦せて来ているのだ。僕はふとそのページをのぞき込んだ。すると、その女は、日本人かと思うような顔をしている。しかしよく見るとドイツ人であつた。

僕がのぞき込んでゐる気配を感じたのであろう。貞男は厭な顔をして、雑誌の他のページを繰った。

僕にはそのときの顔が何か印象に残つて、しばし、貞男のことは忘れてしまつて、ただその絵の顔を思い浮べていると、貞男は僕の心がその雑誌から離れたのを直感したのであろう。また、そのページを開いて見入っているのだ。

僕は何か無気味な感じがした。貞男はまるで、その女の肖像に淫しているといったような、厭な印象を受けた。

「おい貞男、僕と一緒に散歩しないか」

「うん、してもいい」

僕は、その雑誌と貞男とを引き離すために、散歩に誘つ

た。

貞男は雑誌を丁寧^{ていねい}に机の抽出^{しゅしゅ}しにしまつて、僕について、晩秋の町に出た。二人は銀座まで自動車を飛ばして、ガラス張りのような喫茶店に入つた。僕はなんの計画もなくそこに入つたのであつたが、大きな鉢植の植物の、蔭になつてゐるような隅の席にかけると、貞男は僕が計画的にそこに貞男を連れ込んだと思つたのであらう。貞男は探るやうに僕の顔を見ていたが、やがて不思議なことを言つた。

「叔父さん。女というものが判るかい」

「女？ 女がどうしたのだ。さっきの絵の雑誌にあつた女のことか」

「ううん、そうじゃあない。あれに似た女だけれど、日本人だ。——そうか、叔父さんはここへ僕を連れ出したのは、その話をさせるためではなかつたのだな」

僕には貞男の考^{かんが}へてゐることが、それで判つた。貞男は、この部屋の中に植物を置いてゐるのを僕に見せて、貞男に海岸のことを思い出させて、何かを話させるつもりだつたと勘を繰つたのであつた。貞男という子は、前から、そんな子であつた。

それが判つたので、僕も貞男が取り扱いよくなつた。だから案外^{なま}あとは滑らかにこんで、とうとう、貞男に次の

ような話をさせることに、成功したのであつた。

2

葉山には一家族ゆくために、相当広い別荘を借りていたが、貞男は一人で住んでいた。

今年借りた家の隣は、なかなか豪壮な別荘ふうであつたが、貞男が避暑に行つてから四、五日すると人が来た。女ばかりであるらしいのと、貞男と同じように朝と夕刻しか海岸へ出ないのとが一致して、その女主人と思われる人と話をするようになった。

初めは、何か財産家の夫人で、良人^{よんど}はいそがしい実業家何かやつてゐるので、来ることが稀^{まれ}なのだろうと思つていたが、そのうちに未亡人であることがわかつた。

その頃には、貞男はその女をばげしく恋するようになっていたのであつた。

貞男の心を惹いたのは、いかにもその女が、世の中とは没交渉^{めいこうしやう}に生きてゐることであつた。たとえば或る日、貞男は慶応大学の制服を着ていた。女は、初めこれを帝大の制服だとばかり思つていたらしく、或るときに、そうではないことを知ると、いかにも珍しいことを聞いたというふう

「慶応大学って大学もあるんですか」
ときいた。

貞男はこの言葉が、少しも不快ではなかった。他の場合に、そんなことを言われると、いかにも不快に思うであろうその言葉が、少しも気にならぬのは、女がいかにも新発見をしたというような、その新しく知った大学はどんなにいい大学であろうといったような瞳を向けて、そう言ったからであった。

しかしなんぼなんだって、慶応大学という名称を知らぬというのは、迂^う愚^ぐな話だとも思われる筈であるが、貞男にはそう思われるより先に、その女が、少しも世間のことを注意しようとしないうち、或いはかえって故意に、世間のことを知らないでいようとしているような態度が、ありありと見えていたのである。

未亡人で、そして良人の亡くなったあと、ただその残されている財産で生きて行くだけで、故意に世間と没交渉でいようというような考えを持っている——そのくせ、女は健康に恵まれて、水着を着た胸から腰のあたりは、はち切れるようであった。

女の方が年齢が四つばかり上であったが、貞男はとうとう女が承知してくれるならば、どういう形式でもいい、結

婚をしたいと考えるようになった。

初めは、女も笑って承知しなかった。

「駄目ですよ。私みたいなお婆あさんのことをそんなに思っては。お友達になってあげるわ、どんなに親しいお友達にでもなってあげるわ」

そう女は言った。そして或る日は、

「ええ、いいわ、私ね、やはり考えてみるとあなたを恋しているわ。だから恋人になってちょうだいとおっしゃるならば、なってあげてよ」

と言った。

男は、この言葉を誤解したのだ。

「恋人って、だって今、われわれは恋人同士じゃありませんか。だから、僕は、ただの恋人だけじゃ厭だ。是非とも結婚してくれなくっては」

「そんなことを言うものじゃありませんよ。結婚なんかせずとも、どんな親しい恋人にだってなつてあげるわ」

この言葉が貞男にはわからなかった。

それに、貞男は、あとで残念がつて話したのだが、その頃まだ童貞であった。だから、結婚ということ以外に、恋人を手に入れる方法はないものと一途に信じていたのであった。なぜあのときに、そのまま女と親しくしてしまわな

かったのであろう。今ならよく判るあの女の言葉がなぜわからなかったのだらう。そう言って貞男は口惜しがったのであったが、事実、そのときは、女の言う意味が、はっきり判らなかったのである。

判らなかつたのには、もっと別の理由もあった。それは次のような問答があつたことをみればなるほどと思うであらう。

「では、結婚もしないで、あなたは僕と一緒に住んでくれますか」

「一緒に住む？ いいえ、それはいけないの。結婚すること、一緒に住むこともいけないの。ただ、そんなことなしに、私は、あなたのものになってあげてよ」

「しかし、なぜいけないのです。あなたが僕と結婚すること、妨げる事情はなんにもないじゃありませんか。子供があるわけではなし、むずかしいことを言う親があるわけでもない。むずかしいのは僕の方にあるのです。その僕がそれをどうにでもすると言っているのに」

「あら、けれど、なぜでしょうねえ、結婚しなくなつて、したのと同じになつてあげると、これほど言っているのに」

二人は、そうして執拗に争つた。
そのうちに不思議なことが起つた。

或る、とても暑い日であつた。貞男は隣の別荘に行つてみると、女が突然これから海へ入らないかと言う。貞男が水着をとり、うちに帰ろうとすると、今夜は闇夜だから水着なしでもいいではないか、と女が言うのだ。

しかしさすがに女だけは、水着を着て出かけた。女の水着は白い毛であんだ水着であつた。この水着は上等のものであつた。着ている恰好も特別で、誰が見ても好ましくなるような水着であつた。オーストリアから取りよせたのだと言つていた。

二人は、ふざけながらいぶ沖へ行つたが、とうとう女がへばり出したので、貞男は女を背負つて帰らねばならなくなつた。ところがよく見ると、女は、いつの間にか水着を脱いでしまつていた。泳ぎながら水着を脱いでしまつたのであろう。そして水着は何処どこともなく夜の海に漾たぎつていたのであろう。

溺れそうになつたので女を背負つた。女はかじりついてその上、しっかりおぶさるので、さすがの貞男も面喰つたのと、重いのですっかり疲れて来て、二、三度二人で溺れそうになつて、ヘトヘトになつて岸に上つたのであつた。岸に上ると、女は裸のままバス・ローブをひっかけて、前を気にしながら家にかえて来た。

帰って来ると急に、女に変化が起った。

今まで、二人の交際が始まってから、実におだやかな女であつたが、それがすっかり癪^{かん}が高くなつてしまつて、さあ、私の海に落して来た水着を、明日から探して下さい、その水着が見つかるまで、私は海に行かぬ決心だと言う。命令するようにそう言っているかと思うと、急に貞男にもたれて女が泣き出した。

潮水のついた裸のまま、客間の椅子に坐り込んだので、貞男は海の藻のような女の髪^{かみ}の香^{かぐり}に咽^ひせながら、次のよう不思議な言葉を交すことになつたのである。

「あなたは呪いということを知っていますか」

「呪い——そんなこと今はありませんよ」

「いいえ、あるの、私はどうしてもあなたと結婚出来ないのは、その呪いのためなのよ」

「へー、呪いなんて、あなたは信ずる人ですか」

「いいえ、信じはしないの、信じないけれど、実際に私の身のうちにあるのを自分で感ずるの。だから私の言うのは、けつして世の中にそういうものがあると思うから恐れるのじゃなくて、私の身のうちにそれがあつてどうしても取れないの」

「取れない？ では呪いというのは取れることもあるもの

なんですか」

「そう感ずるわ、私は人殺しをすれば、それが取れる、さっぱりすると思うの、だからあなたと——そう、大切な人とは結婚出来ないわ」

「大切な人間と？」

「そう、ちつとも大切でない人間とならば、今だって結婚出来ると思うんだけれど」

「そんな不合理なことありませんよ。大切な、好きな人間と結婚するよりほかに、いい結婚はありません」

「そんなこと公式だわ、公式だけで数学は解けないわ」

「僕なら解いて見せます」

「お馬鹿さんね。この世のこと、皆わかつてるみたいなお言葉ね——だったら、明日水着探して来てよ」

翌日、貞男が正直に女の水着を探しに出たことは言うまでもない。しかし、海の中をいくら探したとて、昨夜女の脱ぎ捨てた水着が、そのまま濊^{ただよ}っているわけがなかった。

貞男はかなり深いところまで行き何度も水をくぐつてみたが、ついに探しあてることが出来なかつた。そして何か水着を持って行かなくては女に逢えないといったような、変な拘束を感じた。少しも女と約束したつもりはなかつたのだが、貞男はそういう不可抗な感じを持つてしまったの

だ。貞男がこの不可抗な感情に引つかかって、二日ばかり水着を探しているうちに、女が呪いのあるのを身内に感ずると言ったのが判ったような気がしだした。女の言う呪いの内容は少しも判らない。しかし、水着を探し当てなくては逢わないと女が言ったわけでもなんでもないのに、自分がこうして、何か水着に縛られてしまった気持がそれだ——そう思った。

そう思った瞬間に、その呪いが消え去って、すぐと女のところに逢いに行けるような、軽い気持になったのだ。

ところが、たちまちにしかけて行くと、女の家門は堅く閉ざされてしまっている。そして留守居の者に聞くと、今朝早く東京へ行ったというのである。

それからあと、女は全く貞男の視界から消え失せてしまったのである。謎のように、消え失せてしまったのである。貞男は言うのであった。その謎は夜の海から来た。深い海から来た。夕暮とか、夜とかに、大空より落ちて来た、海の謎である、と。

3

「ほう。それで貞男は元気をなくしたというわけか」

「うん。そんなわけで、僕は東京へ帰って来た、そして女

を探した。探すといったらとて財産もあり家もあるのだから、探せば逢えると思っていたのだが、——そのために、まるで探偵のような気持で女の跡を慕い追ったが結局無駄であった。女を持ち物、家も土地も、従来の持っていたものはすっかり売って現金に替えて、どこかへ行ってしまったのだ。殊に不思議なのは、僕は探偵をも頼んで調査したのだが、何故に、そう急にやったのがわからぬことだ。葉山の家などは、そのあと気がついて調べに行ったところが、やはり売られておった。その仲介者なども尋ねてみたが、仲介のまた仲介などがあるらしく、結局、女の話はばったりなくなってしまったのだ」

「ふうん。それで何か、貞男はその女が貞男を逃げるために去ったと思っているのか」

「いいや、僕は逃げんでも、変な追究はしない。そういう人間であることを、女はよく知っている筈なのだ。そればかりではない。僕は女がけっして僕を嫌ったのじゃあないということを確認している」

「それはうぬ惚れというものさ」

貞男は、僕がこう言うとき黙ってしまった。

しかし、それでけっして閉塞させられたのではないことは、僕にはよくわかった。貞男は、折から給仕の持つて来

たレモン紅茶をすすっていたが、やがて、

「女というものは、僕にはわからない。僕はそれまでは、母や女同胞などを見たばかりであるが、女というものはわかったと思っていた。しかし、このときからあと、女というものが少しも判らなくなったのだ」

と言いつ出した。

「そりゃ女には、論理なんてありはしない」

「いいや、叔父さん、その女には何か論理があるのだ。僕はそう思った。だから、探偵を雇って女の前身をも探ってみた」

「そんなことまでしたのか」

「うん。ところが、その女の良人というのは、馬から落ちて死んだのだ。それも箱根から熱海に出る山の中で、そんなところを乱暴にも二人は馬で歩いたとみえる。——何しろブルジョワなんだから。そこで僕は、ひょっとすると、女が良人を殺したのかとも思って、なおその点をわかるだけは調べたが、そうではないらしい。良人は立派に妻に遺産を与えているのだ」

貞男はそう言つて、あとは沈んで黙つた。

「要するに、僕には女というものが、解きたい謎となつてしまった。困つたことに、それ以来、どの女でも女のす

ることがどうしても呑み込めない。その動機や理由を察する力はなくなつたわけではないが、ピッタリと呑み込めない。僕の現在の悩みはそれだ」

聞いてみると、貞男はまことに理路整然として、この謎を解こうと努力していたのだ。

そのことが判つたものだから、僕も、どうせ女は謎さ、などという誤魔化しの言葉を出すことが出来なくなつた。

病人が苦痛を訴えるのは苦痛の体験から来ているので、傍で医者がいくら説服したとてそれで苦痛を柔らげるということも、解き放つことも出来ぬのは当然なのだ。貞男はこの際病人のようなものだと思つたのだ。

僕は匙を投げた。

いくら兄に頼まれても、貞男のように物のよくわかる子が、僕の力でどうにもなるわけがないと、兄にも言つた。だが兄には女のことはもちろん話さなかつた。そして、どうも、これはこのまま様子を見るよりほかはあるまい、時の経過が癒してくれるであろうと、言うよりほかはなかつた。

貞男は、女という謎を解こうとしているのだ。

しかも僕の眼から見ると、女などというものはわかりにくいものだと思つていた。まれに、謎のような女があるのだ